

2020年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」  
事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 宮城県 】

学校名【 宮城県利府高等学校 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ・Ⅴ 】
2 実施対象者	宮城県利府高等学校 スポーツ科学科2年次（2クラス） 71名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名（スポーツ総合演習）</p> <p>② 行事名（ ）</p> <p>③ その他（ ）</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名（ ）</p> <p>② その他（ ）</p>
4 目標 (ねらい)	ボッチャの実技体験を通して、特別な支援を必要とする人に対しての支援の在り方を学び、すべての人々が社会やスポーツに参画できる社会づくりへの振興発展にかかわることができる資質や能力を育む。
5 取組内容	<p>本校スポーツ科学科では、競技力向上に関する知識・技能について学習するだけではなく、これからの社会でスポーツの振興・発展に寄与していくために、障がい者スポーツに関する学習・体験も実施している。今までゴールボールやフロアバレー、ブラインドサッカーなどの体験も実施しているが、本年度は本事業を利用して、ボッチャに関する実技体験を2クラスの生徒を3グループに分割してグループ1回ずつ計3回実施した。</p> <p>ボッチャは、脳性麻痺などの運動能力に障がいがある競技者向けに考案されたスポーツであり、リオパラリンピックで日本は銀メダルを獲得している。冒頭の指導ではボッチャのスポーツとしての概要やルールまた共生社会について説明があり、その内容に生徒達は熱心に聴き入っていた。</p> <p>その後、生徒たち全員で実際にボッチャの体験を行った。ルールを確認した後、実際にボールに触れてみて、ボールを投げる際の力加減や、的を狙うことの難しさを体感した。また、それと同時にボッチャという競技がとても頭を使うスポーツで、周囲の状況を見極める洞察力や、戦術を組み立てる柔軟な発想力、お互いのコミュニケーション等が必要不可欠であることを知り、生徒たちはボッチャという競技により一層興味を持ったようである。</p>



実技体験の様子①



実技体験の様子②

## 6 主な成果

ボッチャ実技体験終了後にアンケートを行い、生徒たちに下記の質問をしたところ、結果は次のとおりであった。

Q：今回の講義は自らの専攻実技に役立つものでしたか？

- (A) 大変役立つ (71.8%)
- (B) 役立つ (25.4%)
- (C) まあまあ役立つ (2.8%)
- (D) 役立つ (0%)
- (E) その他 (0%)

生徒たちのほとんどが自分の専攻実技（部活動と同じ競技のこと）に役立つと回答しているが、これは授業担当者が説明の中でコーチングに触れたことや、ボッチャという競技が作戦を考える競技であるということが関係していると思われる。生徒たちは、お互いにコミュニケーションを図りながら競技を進めていくということに関して、自分たちの専攻実技と大いに重なる部分があることや、先々の展開まで予測しながら作戦を考えていかなければならないという大変難しい競技であるということを知り、大きく興味をひかれたようであった。

また、アンケートでは、すべての生徒の回答が肯定的なものとなったが、これはこの体験会がオリンピック・パラリンピックを次年度に控えた生徒たちの心に響いたからではないだろうか。

いずれにしても、スポーツが健常者だけのものではなく、性差や年齢、障害の有無に関係なく、誰にとっても平等であるという理念に基づいた授業が行われたことは、今後地域の指導者となって活躍が期待される本校スポーツ科学科の生徒たちにとって、有意義な授業であったと思われる。

<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>2021年の東京オリンピック・パラリンピックが近づいていることもあり、「見る・する・支える」という3つの視点の中でも、「する」「支える」という点に焦点を当てて今回のボッチャ体験を実施した。「する」という視点は、体験をしてただ楽しめばよいということではなく、ボッチャの体験を通して、競技に関わっているパラリンピアン の想いを感じることで、競技者を「支える」という視点につながっていくことを意識した。日々、部活動に励んでいる生徒たちにとって、パラスポーツに触れることは日頃の部活動への取り組みを振り返る機会となるだけでなく、共にスポーツを楽しむ多くのパラスポーツ愛好者の方々に対して理解を広げる良い機会となっている。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>生徒は興味をもってボッチャ体験をしていたが、2クラスを少人数に分割したことは効果的であったと思われる。また、内容的にはスポーツ科学科に限らず、さらに多くの生徒に体験してもらいたいものであった。例年は講師を招いて実施しているが、コロナ禍のため難しかった。講師の指導のもと、ボッチャを体験する上で適正な人数で、かつ複数回にわたって実施できれば、さらに効果的であったと思われる。</p> <p>また、ボッチャは運動能力に障がいがあり、車イスを利用している競技者も多い。運動障がいの体験として、車イスに座りながら手の動きに制限を加えた状態での体験も考えたが、今回は実施しなかった。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>本校スポーツ科学科では、社会でスポーツの振興・発展に寄与していく人材の育成を目的に、どのような障がい者スポーツを取り扱うかなどを常に検討している。その際、講義だけではなく、実際に体験できるかという点も重視している。</p> <p>その点において、ボッチャは障がい者と健常者が共に協力し合いながら競技することができるという点で優れている。来年度以降も学習すべき障がい者スポーツの競技・種目の1つとして検討している。</p>